

青春スクロール

母校群像記

<http://t.asahi.com/dnnn>

「自由は責任伴う」校風が法曹生む

多摩高校から法曹界に進んだ卒業生も少なくない。

お茶やワインを飲みながら憲法を学ぶ活動で注目される弁護士武井由起子（46、1986年卒）は2年までバドミントン部、その後は生物部とロック音



学生時代から何度も中国を訪れ、中国語が堪能な武井



多摩高校 4

楽の「おたまじゃくし」を掛け持ちした。「中学時代、パーマをかけたら不良と言われたが、多摩高では先生から『可愛いね』と言われ、力が抜けた。誰もが自由には責任が伴うことを学び、節度を持って羽目を外していた」。36歳で商社をやめてロースクールに入り、現在は横浜を中心に活躍する。

東京に拠点を置く弁護士の鯉沼希朱（49、84年卒）は、部長を務めたバドミントン部では武井の2年先輩だった。「朝、昼、放課後と、とにかく練習し

た」。努力は実り、3年の県大会は個人・団体戦とも優勝して高校総体に出場。県のスポーツ交流友好訪問団員として、中国・遼寧省も訪問した。「多摩高で自信や責任感、粘り強さが身につきました」



妹と2人の弟も含め「4人きょうだい全員」が多摩高卒という鯉沼

多くの企業で顧問弁護士を務める古賀政治（58、75年卒）は元陸上部員。今もフルマラソンを3時間9分で走る。3年の高校総体予選ではスタート直後にアキレス腱を切り、ゴールしたものの動けず4針縫った。「雰囲気は自由というより放置に近かった。『こんなんで、どうやって外の世界に出て行けばいいんだらう』と将来を考えるきっかけになった」と懐かしむ。

京都地裁所長の並木正男（61、71年卒）は金沢地家裁、京都家裁に続き、所長は3カ所目になる。多摩高では1年で放送部、2年でアマチュア無線部に所属。「教室で合宿し、ラジオ作りなどをしたのが楽しかった」。



高校時代はテニス部員だったが、今は時間があれば山歩きをしている大野

球技大会、文化祭、体育祭のマスコット作りなどを通じて、「どんな場面でも全力を出すことの大切さを学んだ」と振り返る。

元大阪高裁長官で、内閣府情報公開・個人情報保護審査会会長の長の大野市太郎（68、65年卒）はテニス部員だった。ラケットにガットを張るのもコート整備も、自分たちでやった。「自分で考えて自分でやる、という自

主性が身につく、裁判官になっても考え方のベースになった」。担任の先生に南アルプス、北アルプスに連れて行ってもらって山が好きになり、今も時間があれば山歩きを楽しむ。

武井ら「明日の自由を守る若手弁護士の会」のメンバーは、憲法の基本的な考え方や、自民党の改正草案との違いなどを説明する「ティーサロン憲法」を開いている。お茶やコーヒーを飲みながらの自由な雰囲気の中で、押しつけではなく、比較してもらうのが目的という。ワインを楽しみながら学ぶ会もある。問い合わせは、はまかぜ法律事務所（045・212・5688）へ。